

中国雲南省における少数民族の分布について

Research on the Distribution of Ethnic Minorities in Yunnan Province, China

杜 国 慶*
DU, Guoqing

Abstract: Located in Southwest China, Yunnan Province is the area with the most varieties of nature and ethnic minorities in China. By this paper, we investigate the diversities of nature, and try to clarify the relationship between the distribution of ethnic minorities and nature conditions. Furthermore, the system of administrative division and poverty problem with ethnic minorities in Yunnan Province will be discussed.

Key words: 少数民族 (ethnic minority), 分布 (distribution), 行政区画 (administrative division), 貧困問題 (poverty problem), 雲南省 (Yunnan Province), 中国 (China)

- I 雲南の自然条件と環境
- II 人口構成にみる雲南省の少数民族
- III 少数民族分布の自然的な要因
- IV 行政区画にみる雲南省の少数民族
- V 少数民族地域の貧困問題

中国明代の地理学者徐霞客 (1586-1641) は、長江沿岸一帯から雲南、貴州まで歩き廻り、各地の自然地理および民族を観察して、詳細な記録を旅行記「徐霞客遊記」に纏めた。特に雲南の自然、文化、風土を愛し、彼が記した「徐霞客遊記」には、雲南の地理学、民族学上などにおいて貴重な資料が残されている。現存する旅日記の「徐霞客遊記」には、雲南の記述に誌面の1/3が割かれている。彼はこの地で河川の源流を辿り、地形の調査を手がけて、地質学、植物学などの分野に数々の発見をもたらした (張, 2003)。

このような中国国内の探検家のみならず、18世紀末から19世紀初頭にかけて、海外からの探検家・宣教師・科学者たちも中国の奥地、雲南に足を伸ばした。中では、ジョセフ・ロック

(Joseph F. Rock, 1884-1962) が最も著名である。ジョセフ・ロックは1922年2月に、アメリカ農業省の派遣調査で、中国雲南に赴くことになった。ウィルスワクチンとなるケシの探索が目的であったが、少数民族の文化に惹かれ、文化人類学者へ転身した (和, 2003)。ジョセフ・ロックの名を世に知らしめたのは、何といっても雑誌「ナショナル・ジオグラフィック」に掲載された彼の記事であった。題材は壮大な自然風景、地方匪賊の度重なる抗争、貧しい辺境、土司 (部族の長) や活仏など多岐に渡る。ロックは1949年8月、中華人民共和国が成立する直前まで雲南省の麗江に滞在した。彼が撮影したその時の写真は、麗江および東巴文化研究の重要な参考になっている (宣, 1999)。そして、早くから東巴象形文字の価値を認識し、「ナショナル・ジオグラフィック」などのメディアを通して麗江の自然とともにナシ族の文化を世界に披露することが、彼の最大な貢献と言えよう。当時彼の写真と記事は、小説「失われた地平線」(Lost Horizon) の題材になったとも言われる。この小説は中国西部の少数民族地域の神

*立教大学観光学部・教授

秘さで大ヒットし、後に映画化され、「シャングリラ」という美しい名称を残した。

このように、雲南の自然と民族は中国内外の探検家や科学者によって、世の中に知られるようになったが、その自然と民族の複雑さによってまだ解明されていないことが多く残されている。本研究は、雲南省の少数民族の人口構成を分析し、少数民族の分布を自然基盤と自然的要因、行政区画の側面から解明し、最後に、少数民族地域の貧困問題を論述する。

I 雲南の自然条件と環境

雲南は中国で最も複雑かつ多様性に富む地域である。北の梅里雪山(6,740 m)から南の元江河口(76.4 m)までの標高差は著しく、横断山脈の山奥でヤマツツジやシュンランが咲き乱れるかと思えば、熱帯雨林の西双版纳では象やテナガザルが出没する(劉, 2003)。雲南の自然の多様性は、横断山脈の地形によるものと考えられる。南北に連なる高黎貢山、怒江(サルウィン川)、雲嶺、碧羅雪山、無量山、哀牢山、そして瀾滄江(メコン川)などの山水が、東西の交通を切断し、民族のコミュニケーションと文化的交流も切断された。したがって、横断山脈の中では多数の独特な少数民族文化が形成された。

南北方向に走る横断山脈は、少数民族の独自性を形成させただけではなく、同時にその地域における生物の多様性も育んだ。度重なる氷河期とその間の間氷期のリズムによって、氷河期に植物は南へ進み、氷が溶ける間氷期には植物は北へ戻る。東西方向の大きな山と重なり合う場合、植物の南北的な移動は阻まれて生き残ることが難しいが、雲南地域の植物は横断山脈に沿って、南北方向に進退を続けてきた。この現象は世界でも珍しく、古代裸子植物が残る要因になっていると言われる(杜, 2006)。

今日では、その個性豊かな風土に憧れて、多くの観光客が雲南を訪れている。雲南のその魅力とは、植物でいうと、雲南には赤道から南北両極までの、熱帯、亜熱帯、温帯、極地の全ての植物群落が多数存在する。動物の種類も多く、特にアジ

ア象、ミドリ孔雀、コバナテング猿などは、中国で唯一、生存する地域である。そして、雲南には29の少数民族自治県と中国56民族のうち25の少数民族が暮らし、世界の四大宗教がすべて祀られている。多種多様な民族文化に溢れ、研究者そして観光客の好奇心を一身に浴びている(単, 2003)。

雲南の自然の多様性はまず地形に規定されていると考えられる。雲南の地形は多様性を持ち、しかも珍しい。雲南の地形は上述のように標高の格差が目立つが、河川の分布で大きな特徴が分かる。怒江(サルウィン川)、瀾滄江(メコン川)、金沙江(長江の上流)の三つの大河は互いに150 km以内の距離を平行して流れ、路南の石林、元謀の土林、騰衝の火山群と温泉などは、世界的な絶景である。そして現在、雲南省はラオス、ミャンマー、ベトナムの国境に接し、省内の瀾滄江(メコン川)と怒江(サルウィン川)が並行して東南アジア諸国を流れる国際河川であるため、中国の中でも東南アジアへの玄関口として重要な位置付けを示す(単, 2003)。加えて、雲南の南部と東部には紅河と南盤江が走っている。図1で示すように、雲南省全域をイラワディ川流域、怒江(サルウィン川)流域、瀾滄江(メコン川)流域、金沙江流域、紅河流域、南盤江流域に分けることができる。

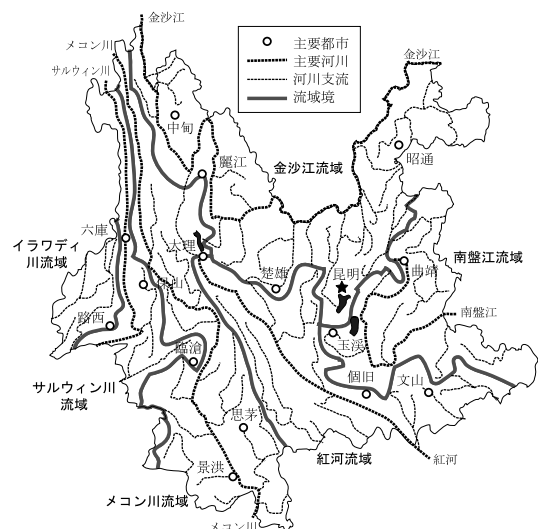


図1 雲南省の主な河川と流域

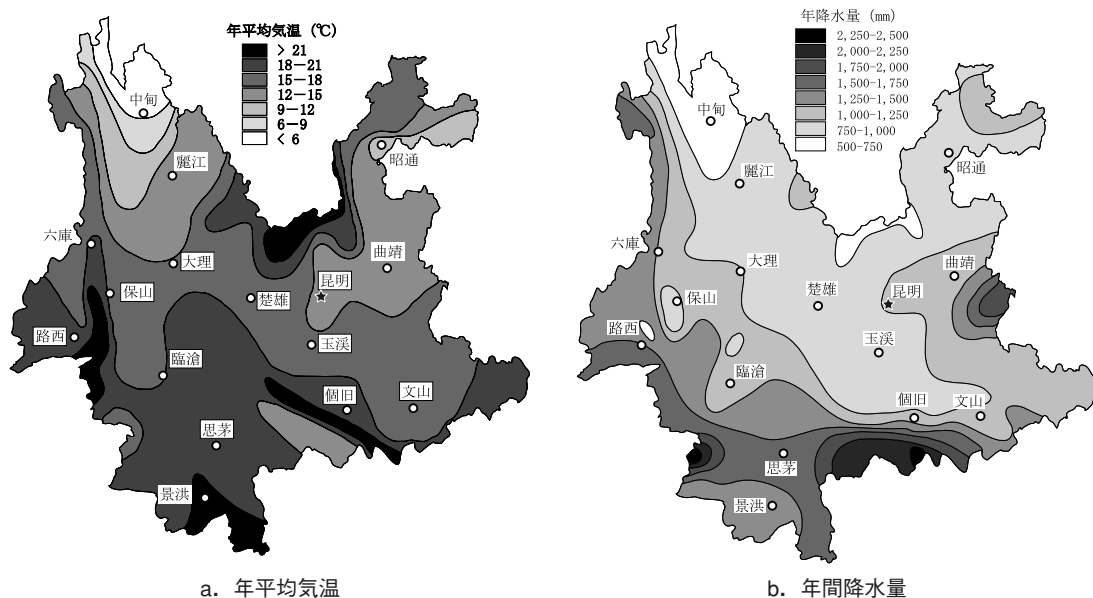


図2 雲南省の年平均気温と年間降水量の分布

地形による影響は、気候を示す年平均気温（図2a）と年降水量（図2b）と年降水量の分布にも現れている。年平均気温と降水量の等値線の分布は緯度線に並行して南高北低となっているものの、上述の地形すなわち河川の分布によって大きな湾曲を成す。特に河川の渓谷では標高が低くなるため、年平均気温と降水量も局地的に高くなる。年平均気温の分布より、降水量の分布が比較的に単純な傾向を示す。例えば、年降水量が750-1,000 mmと1,000-1,250 mmの地域がほとんどの主要都市を網羅しており、省域の8割を占める。

地形と年平均気温、年間降水量など気候要因を含めた気候帯の分布は図3で示すとおりである。亜熱帯の範囲が最も大きいものの、熱帯と温帯、高原気候の気候帯も存在し、気候の多様性も確認できる。特に、北熱帯の分布は河川の渓谷に沿って分布していることが顕著な特徴となる。

自然の多種多様性に富む雲南省には、豊かな自然資源が存在する。現在、鉱業を始め、煙草と生物資源産業、観光、電力が省の五大基幹産業と言われ、地下資源、農林一次資源、自然・人文観光資源、水資源に基づく地場資源型の産業が展開している。

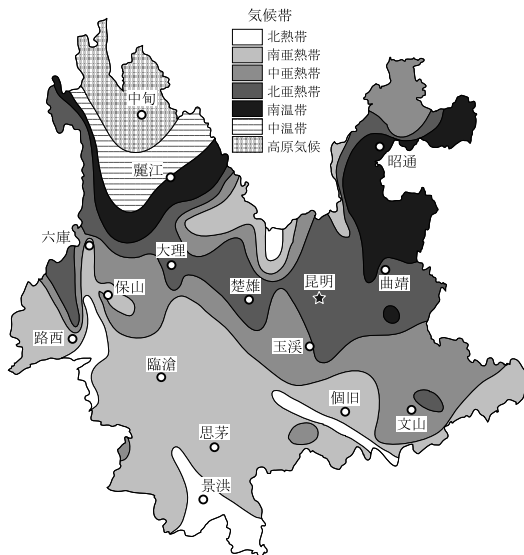


図3 雲南省の気候帯分布

鉱物地下資源について、磷酸肥料の原料として欠かせない磷鉱石は雲南省がモロッコ、米国フロリダ州と並んで世界三大生産地であり、この3カ所の磷鉱石採掘量は世界の2/3も占める。錫は古くから知られ鉱山開発、精練がなされており、紅河ハニ族自治州の州都箇旧市が主な産地であ

り、中国全国の錫産出量の約9割を占める。煙草加工業は雲南省の基幹産業の一つである。2006年の紙巻タバコの生産量は648万箱、葉タバコは54万トンとなっており、中国の煙草加工業販売収入額の1位と4位、8位の煙草加工会社が雲南省にある。

生物資源のサトウキビ、茶葉、天然ゴム、林産物、畜産物を原料とする天然医薬、食品、花卉、バイオテクノロジー製品があげられる。雲南省は海拔約100–6,000 mの多様な地形と局地気候をもつため、動植物種が豊富で「生物遺伝子資源の宝庫」と言われている。生薬、食用茸、天然ゴム、松脂が経済作物として栽培されている。特に、花卉（切り花、鉢植え植物）はサトウキビ、茶、薬草と並んで重要な地域資源である。切り花は昆明市とその南部に接する玉溪市、西部に接する楚雄市で生産されている。鉢植え植物の生産地はおもに楚雄州および昆明市、大理市である（西澤、2008）。

II 人口構成にみる雲南省の少数民族

「中国統計年鑑2009」によると、2008年現在、少数民族人口が総人口に占める割合をみると、雲南省（55.6%）はチベット（95.6%）、湖南

（74.2%）、重慶（68.7%）、青海（62.7%）、新疆（60.8%）、貴州（59.3%）、河北（58.7%）、四川（58.5%）、甘粛（57.2%）に次いで第10位となっており、高いとはいえない。しかし、行政区画からみれば、雲南省には8の民族自治州と29の民族自治県もあり、いずれも中国で最多で他の地域と大きな開きを置く。表1が示すように、雲南省には主に22の少数民族も居住する。うち、アチャンとドアン、ハニ、ブーラン、ラフ、チンポー、タイ、ジノー、ワー、プミ、ヌー、リス、ナシ、トールン族の14の少数民族は95%以上の人口が雲南省に居住している。以上の行政区画と人口割合の分析で、多民族の混在と集住が雲南省の最大の特徴としてあげられる。

雲南省はミャンマーとラオス、ベトナムとも長さ4,100 kmの国境を接しているため、10数種の少数民族が国境を挟んで分布しており、政治と経済、安全保障の面で大変複雑な問題をかかえているとも言えよう（進藤、1984）。

III 少数民族分布の自然的な要因

多民族が混在または集住する現象は、自然に基づく基盤が存在するからとも言えよう。雲南省における自然の複雑さと多種多様性は中国で稀少な

表1 人口センサスから見る雲南省の少数民族

少数民族表記		人口 (万)	割合 (%)	少数民族表記		人口 (万)	割合 (%)
日本語	中国語			日本語	中国語		
アチャン	阿昌	3.39	99.7	リス	傈僳	63.49	96.9
ドアン	德昂	1.79	99.6	ナシ	納西	30.88	95.6
ハニ	哈尼	143.97	99.5	トールン	独龍	0.74	95.1
ブーラン	布朗	9.19	99.4	バー	白	185.81	84.0
ラフ	拉祜	45.37	99.2	イ	彝	776.23	61.7
チンポー	景頗	13.21	99.2	ミャオ	苗	894.01	12.1
タイ	傣	115.90	99.0	ヤオ	瑶	263.74	8.1
ジノー	基諾	2.09	99.0	チワン	壮	1617.88	6.5
ワ	佤	39.66	98.8	チベット	藏	541.60	2.4
プミ	普米	3.36	98.8	スイ	水	40.69	2.2
ヌー	怒	2.88	98.0	ブイ	布依	297.15	1.3

注：①割合（%）は、その民族の雲南省に分布する人口がその民族の人口総数に占める割合を示す。

②中華人民共和国国家統計局（2001）のデータに基づいて作成。

存在であり、横断山脈の存在に由来するものと考えられる。南北に連なる横断山脈が東西の交通を切断したため、民族の南北移動の通廊を形成したとともに、民族のコミュニケーションと東西の文化的交流も切断した。

加えて、北と南の民族の漸移帯ともいわれる雲南省での少数民族の分布は、気候に大きく影響されるとも考えられる。同緯度の中国ほかの地域と比べれば、雲南省は冬暖かく夏涼しいと言われる。低緯度の雲南が夏も涼しくなるのは、1,000–3,000 m級の準平原・高原が広範囲に存在することに理由がある。5月から10月までに年間降雨量の80%が集中する明瞭な雨季が現れており、高原亜熱帯モンスーン地域と言える。しかし、高原面は下刻作用の激しい大河川に切られ、河谷は峻険な深いV字谷を成し、河谷低地と盆地は高原面から500–1,500 mまで浸食されるため、高度による気候の変化が激しい。深いV字谷は熱帯大陸気団の進入路となり、イラワディ、サルウィン、メコン、紅河沿いに高温・多雨区が内陸深くまで入り込む（古川、1997）。

このように、少数民族の分布は自然条件の影響を受け、特定の環境と関係しているとも言えよう。古川（1997）は民族分布を生態誌の視点から、尹（1989）に基づいて雲南省の少数民族分布を寒温带チベット高原区、北亜熱帯滇西北山地区、中亜熱帯滇中高原区、中亜熱帯文山高原区、南亜熱帯滇西南山地区と5地域に分類する。要約すると、北方系の民族であるイ、ナシ、ペー、リス、ドラフ、ハニなどが紀元前に雲南高原へ展開してきたが、これらの民族が入り込めない西南部には主にモンクメール系のワ、ブーラン、ドアン、チンポーなどがいた。そこへ亜熱帯気候に適応した江南のタイ、チワン、ミャオなどが秦漢以後は割りこんできて、雲南高原低位部に分布を広げた。

民族分布をミクロなスケールで考察すると、住み分けが確認できる。住み分けが現れるのは、農牧業を中心とした生業が自然環境に大きく左右されていることに由来する。特に、地形の起伏が激しい雲南省北西部には海拔の高度差にそって民族の垂直的な住み分けが特徴である。

金丸（2008）の研究によると、雲南省西北部で

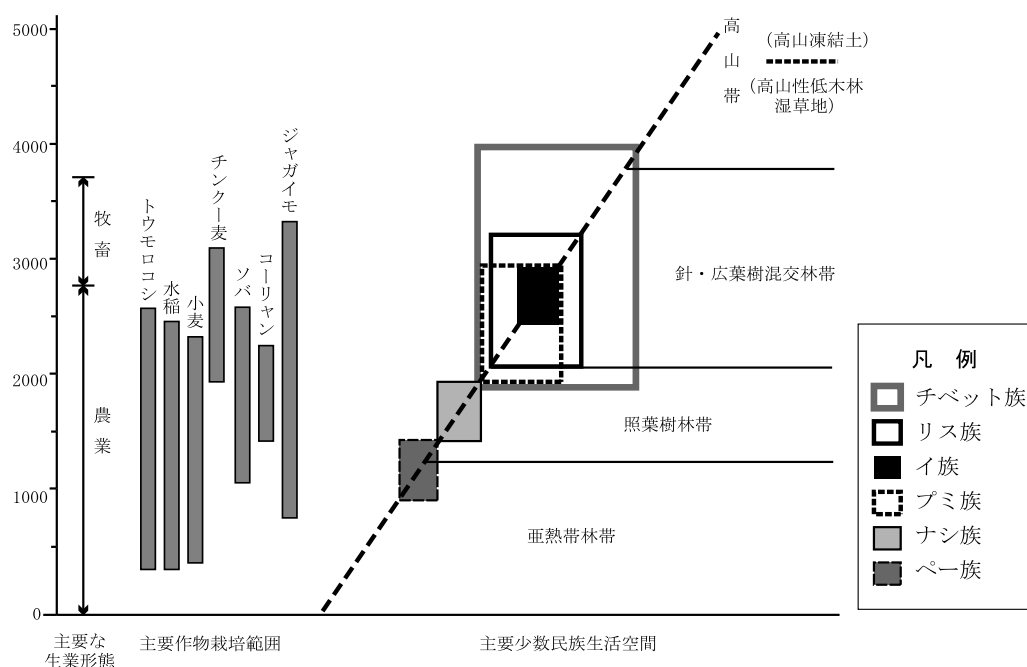


図4 雲南省北部における海拔高度による少数民族住み分けモデル
（金丸、2008より引用）

は、海拔高度の高い地域から低い地域にかけて、順にチベット族、リス族、イ族、プミ族、ナシ族、ペー族というように、生活空間の一部が重複しているが、住み分け現象が認められる。

チベット族は、海拔高度が最も高い1,900–4,000 mの地域に分布・居住している。リス族は、海拔高度2,200–3,300 mを生活空間としているが、一部はチベット族の生活空間と完全に重複している。イ族の生活空間は、2,500–3,000 mで、チベット族、リス族と生活空間が重複している。プミ族も海拔高度2,000–3,000 mを生活空間としている。したがって、チベット族など上述の3民族集団と生活空間が重複している。ナシ族の生活空間は、海拔高度1,500–1,900 mであり、農業が生業の中心となり、牧畜業はほとんどない。ペー族は、雲南省西北部において最も海拔高度が低い地域で生活を営んでおり、生活空間は海拔900–1500 mの亜熱帯気候に所属し、生業形態はナシ族と同様に農業が中心となる（図4）。

IV 行政区画にみる雲南省の少数民族

中国は、民族区域自治という少数民族政策をとっており、民族ごとに集住地域を「区域自治」の領域として指定した。そこでは、「民族の文字・言語を使用する権利」、「一定の財産の管理権」、「一定規模の警察・民兵部隊の組織権」、「区域内で通用する単行法令の制定権」などを認める（杜, 2009）。

法律の規定によれば、民族自治地方における人民代表大会常務委員会の主任と副主任、自治区主席、自治州長、自治県長は、その民族の公民が担当する（中華人民共和国国務院新聞弁公室, 2000）。現行制度下では、第一級行政区画として省、自治区、直轄市、下位の地級（地区級）行政単位として地区、地級市、アイマク（盟）、自治州、さらに下の県級の行政単位として県、県級市、旗（ホショー）、そして末端の行政単位として郷、スムがある。

現在、雲南省には省のすぐ下に8の地級市（昆明、曲靖、玉溪、保山、昭通、臨滄、普洱、麗江）の他に、8少数民族自治州（楚雄、紅河、文山、西

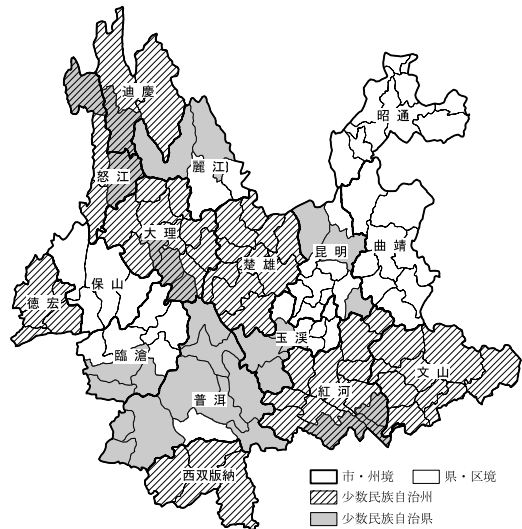


図5 雲南省の行政区画

双版纳、大理、德宏、怒江、迪慶）、計16の区画が設置されている。雲南省には多種の民族が分布しているため、この16の地区級区画の下には、29の民族自治県も設置されている（図5）。

8民族自治州は楚雄イ族自治州、紅河ハニ族イ族自治州、文山チワン族ミャオ族イ族自治州、西双版纳タイ族自治州、大理ペー族自治州、德宏タイ族ジンポー族自治州、怒江リス族自治州、迪慶チベット族自治州を指す。名称の通り、州によって単一民族が集住する地域と多民族が混住する地域に分かれる。これらの民族自治州は中華人民共和国成立する直後に、1953年に西双版纳と德宏、1954年に怒江、1956年に大理、1957年に迪慶と紅河、1958年に文山と楚雄が設置され、1950年代に民族自治州の設置が完了した。

民族自治州より小さい民族自治区域は民族自治県である。表2で示す通り、29の民族自治県は1953年の自治州設置よりも早い1951年に峨山イ族自治県が設置され、以降、1950年代には民族自治州の設置とともに瀾滄、江城、孟連、耿馬、寧浪、貢山、巍山、石林、尋甸、屏辺、河口、滄源の12の県にラフ、ハニ、イ、タイ、ワ、ドロ、ヌー、回、ミャオ、ヤオなどの民族自治県が設置された。1960年代の自治県設置は麗江と南澗、西盟の3県だけごく少数の県に限られ、

表2 雲南省の少数民族自治県および設置年

自治県	民族	設置年	所在市・州
峨山	イ	1951	玉溪市
瀾滄	ラフ	1953	普洱市
江城	ハニ, イ	1954	
孟連	タイ, ラフ, ワ		
耿馬	タイ, ワ	1955	臨滄市
寧浪	イ	1956	麗江市
貢山	ドロン, ヌー		怒江リス族自治州 (1954)
巍山	イ, 回		大理ペー族自治州 (1956)
石林	イ		昆明市
尋甸	回, イ		
屏辺	ミャオ	1958	紅河ハニ族イ族自治州 (1957)
河口	ヤオ		臨滄市
滄源	ワ		
麗江	ナシ	1961	麗江市
南澗	イ	1963	大理ペー族自治州 (1956)
西盟	ワ		普洱市
墨江	ハニ	1979	
新平	イ, タイ		
元江	ハニ, イ, タイ		
漾濞	イ	1985	大理ペー族自治州 (1956)
維西	リス		迪慶チベット族自治州 (1957)
金平	ミャオ, ヤオ, タイ		紅河ハニ族イ族自治州 (1957)
禄勛	イ, ミャオ		昆明市
寧	ハニ, イ		普洱市
景東	イ		
景谷	タイ, イ		
双江	ラフ, ワ, ブラン, タイ		臨滄市
蘭坪	ペー, プミ	1987	怒江リス族自治州 (1954)
鎮沅	イ, ハニ, ラフ	1990	普洱市

注：括弧中の数字は民族自治州設置年を示す。
中国行政区画 HP より編集作成。

1966～76年の10年間には民族自治県設置も停滞した。改革開放政策が実施された1978年以後、経済活動の活発化とともに民族の文化とアイデンティティーも重要視され、自治県の設置作業も再び進み、自治県の約半数となる13県が1990年までに設置された。少数民族に対する認知および民族政策の実施は、上記のように社会の変動にも関係すると理解できる。

図6で示すのは2007年雲南省県別人口の分布

である。基本的に、雲南省では東部、特に北東部に人口が集中し、西部、特に北西部では人口が少ない傾向を示す。人口規模が60万人を超える県の中には、民族自治県が含まれていない。すなわち、少数民族自治県はすべて人口が60万人以下の低い水準に止まる。特に、北西部に位置する迪慶と麗江、怒江の3市・州においては、すべての県が40万人以下の小規模な人口を有する。加えて、楚雄と臨滄、普洱、西双版纳、紅河の市・州

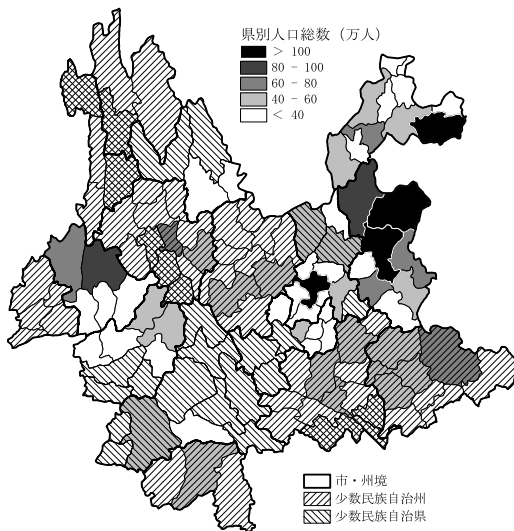


図6 雲南省の県別人口分布 (2007)
 (「雲南省統計年鑑 2007」より作成)

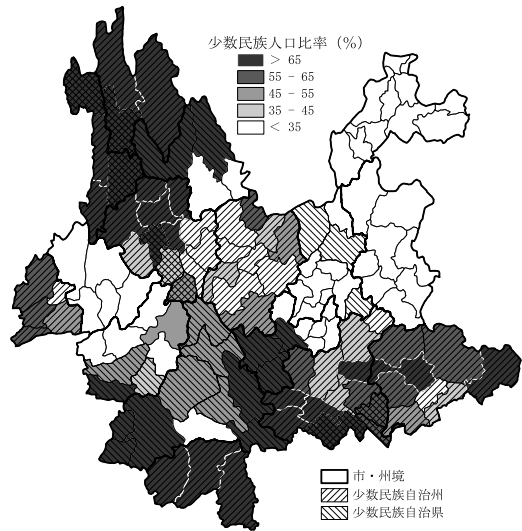


図7 雲南省の県別少数民族割合の分布 (2007 年)
 (「雲南省統計年鑑 2007」より作成)

も 60 万人以上の県・区をもたず、人口が集中する大都市が存在せず、都市の中心機能が欠如していることが分かる。

人口規模と比較になるのは、図7で示す県別少数民族人口が総人口に占める割合の分布である。北東部に位置する昭通、曲靖、昆明の3市は少数民族の割合が35%以下であるに対し、南部と西部、北西部の県は高い割合をもつ。特に、北西部の迪慶と怒江、そして南部の西双版纳において、すべての県・市が65%以上の高い少数民族人口割合を有する。

総括すれば、少数民族が多く分布している地域には、人口規模が小さい傾向は、雲南省の人口または少数民族分布の特等とも言えよう。

1997年から、雲南省では地区を地級市に変える「撤地設市」(地区を撤廃して市を設ける)の行政区画改編が行われた。1998年には昆明市が東川市を合併し、1997年には曲靖と玉溪、2000年には保山、2001年には昭通、2002年には麗江、2003年には臨滄、2007年には思茅が次々と地区から市へ変わった。うち、思茅地区のように普洱市に名称を変えたケースもあった。元の地区政府所在地は殆ど県級市であったため、改編された県級市の「市」と区別して「区」となり、地名が大

きく変わった。そのため、2002年には県レベルの区画が10県級市と9区、109県となり、総数は128と変更がない。2007年には、県レベルの区画が9県級市と12区、108県計129と1つの区画が増えた。

V 少数民族地域の貧困問題

雲南省は中国において経済後進地域でもある。中国政府は貧困撲滅するため、1985年から貧困人口について調査を実行した。貧困に関する基準は、消費支出に占める食費割合が約85%、必要なカロリー摂取量は2100 kclとして算出される。この基準を金額で示すなら、年間一人当たり純収入が1985年は205元、1990年は300元、1999年は625元となる。この基準によると、中国の貧困人口は1980年代に入ってから急速に減少し、1990年代には1億人を下回るようになった。ただし、1980年代、1990年代の中国の貧困基準は、衣食が満たされた生存水準(温飽水平)であり、世界銀行に用いられる貧困基準の「一人一米国ドル」の基準よりかなり低いものであると指摘されている(大原, 2001)。

都市と農村の所得格差からみれば、雲南省は中

国でチベットについて二番目に格差の大きな省である。2004年の年間一人当たり所得は、都市の所得が農村の4.5倍を超えている(手塚, 2006)。1980年代半ばから貧困対策のための基本単位として、中国は全国的に「貧困県」を指定し、重点的に対策をとってきている。貧困県を中国全国で省別にみると、雲南省が最も多く73県ある。他に、雲南省は独自に貧困県5県を指定した(國務院扶貧弁, 2006)。

しかし、国が指定した73の貧困県のうち、少数民族自治県は半数も超えない21県であり、省が指定した5の貧困県には少数民族自治県が一つもない。いわゆる、貧困地域は民族とは関係ないとも推測できる。貧困問題は少数民族に限らないのか、それとも少数民族自治県が国の優遇政策に恵まれているのか、地域によって異なっていると予想され、詳しく分析する必要があると考えられる。

雲南省における貧困県の分布をみて明らかなのは、一部のわずかな都市周辺を除く、省の大部分が貧困地域であること、またその多くが険しい山岳地域であるということである。

上述の通り、雲南省における少数民族の分布は自然に大きく規定されているものの、民族の歴史などの人文要素および中国の民族識別、行政区画によるものとも考えられる。本研究では県別の統計データを用いて分析を試みたが、民族の分布と住み分けを説明するためには、更なる詳細な統計データ、例えば県の下にある行政単位の郷または鎮、村単位の統計データが必要であることが分かった。小単位の統計に基づく分析は今後の研究に期待する。

参考文献

- 尹 紹亭 (1989)：試論雲南民族地理。地理研究, 8 (1), 40-48.
- 大原盛樹 (2001)：第5章 中国農村の貧困緩和政策と西部大開発。大西康雄 編「中国の西部大開発—内陸発展戦略の行方」, アジア経済研究所。
- 金丸良子 (2008)：中国雲南省西北部における主要少数民族の住み分けモデル。言語と文明, 6, 3-24。
- 國務院扶貧弁 (2006)：新時期592个国家扶貧開發工作重点県名单。http://www.cpad.gov.cn/data/2006/1119/article_331579.htm. 2010年12月10日。
- 進藤義彦 (1984)：雲南省の少数民族の言語に関する若干の資料。アジア研究所紀要, 11, 113-124。
- 宣 科 (訳) (1999)：ジョセフ・ロック。p3-8。ジョセフ・ロック：中国西南古ナシ王国。雲南美術出版社。368 p.
- 單 之薈 (2003)：雲南にいてみてきたもの。中国地理紀行, Vol. 13. 50。
- 中国行政区画 HP：http://www.xzqh.org/html/ 2010年12月10日。
- 中華人民共和国國務院新聞弁公室 (2000)：中国の人権発展50年。
- 中華人民共和国統計局 (2001)：第五次人口普查。中国統計出版社。
- 張 建術 (2003)：徐霞客の足跡を辿り雲南路をゆく—雲南秘境日記一。中国地理紀行, Vol. 13. 20-47。
- 手塚 眞 (2006)：雲南省の農村開発：自然資源、少数民族、およびNGOs。経済学, 251, 124-144。
- 杜 国慶 (2006)：観光開発に伴う世界遺産「麗江古城」の変容。アジア遊学, 第83号。145-159。
- 杜 国慶 (2009)：中国少数民族の分布に関する考察。立教大学観光学部紀要, 第11号, 105-109。
- 西澤正樹 (2008)：中国「辺境」の地域経済と企業 (2)：雲南省昆明市と西双版纳タイ族自治州。アジア研究所紀要, 35, 165-259。
- 古川久雄 (1997)：雲南民族生態誌：生態論理と文明論理。東南アジア研究, 35 (3), 346-421。
- 劉 瑩 (2003)：雲南の奇。中国地理紀行, Vol. 13. 2-17。
- 和 勞宇 (2003)：巨人の陰—ジョセフ・ロックの功罪一。中国地理紀行, Vol. 13, 60-63。

付 記

本研究は日本学術振興会・科学研究費補助金の基盤研究(B) (課題番号 20401043, 平成20～22年度)「中国雲南省における少数民族地域の変容に関する人文地理学的研究」(研究代表者：張 貴民)の成果の一部である。